

ポジティブサポートの世界⑥

「現実」を「将来」に繋げていく

といつゝと、姿勢、行為、意味(2)

村田 愛

『幼児の教育』十二月号「ポジティブサポートの世界」で、将来に向かって現在から一歩チャレンジする機会を得た「ジュン君の場合」を紹介しました。ポジティブサポートが「その時の現実を将来に繋げていく」作業だということが、少しでもイメージしていただけたでしょうか。ジュン君の場合、ポジティブサポートの考え方と養

護学校の先生方の考え方の間に、大きな三つの違いが浮き彫りになりました。第一にジュン君の全体像の考え方の違い。第二にジュン君の人生に対する考え方の違い。そして第三に現在と将来に対する考え方の違いでした。その人の全体像、人生、現在と将来を踏まえ、捉え直し考えていくことは、ポジティブサポートが最も大切にし

ていることです。

今回は、引き続き「現実を将来に繋げていく」ということ」を、ジュン君のあれから今、についての捉え方を通して、さらにポジティブサポートの考え方を書いていきたいと思います。

ジュン君は、公立の養護学校中学部の三年生です。ポジティブサポートのセッションを小学部五年生の時から学期に一度のペースで継続しています。五年間継続してきた、ポジティブサポートのいろいろな段階を経て、ジュン君の現在と将来を参加者全員で丁寧に考えてきました。

ここで、ポジティブサポートの踏む段階を大まかに紹介します。ポジティブサポートの最初の段階は、ジュン君の好きなことや得意などという課題を行い、参加

者やジュン君が共に彼の全体像を立体的に捉え直します。ジュン君のイメージは、それぞれの人人が出会ってい

る環境や関係性によって異なります。しかし、その異なるイメージを聞くこと、それと同時に自分の持っているイメージを考え、表現することに意味があると考えます。ジュン君に対する異なるイメージを聞くことが、自分には見えていなかつたジュン君を知り、ジュン君が多面的な存在であることを知ることへ繋がります。そして、自分とジュン君の間柄だから見えていたことに気付いたり、普段は意識していないなかつたジュン君のイメージを思い起こし意識化したりすることも起こってきます。さらに、それをジュン君や他の参加者の前で表現するということは、自分の発言内容に責任を持つという感覚を生んだり、表現したものもう一度自分の中で考え直すしたりすることに繋がっていくのです。そうして全体像を捉え直していくます。

それと同時に、その人の置かれる現実を捉え直していきます。具体的には、その人の人生や生活において「自分で選んでいること」と「他者が選んでいること」とい

う課題などをやって、その現実を少し客観的に見つめます。次の段階ではジュン君の全体像とその現実を土台に彼の夢や希望について想像力をつかって考えていくます。それは、具体的にジュン君の「将来」を少し身近に考えていくことになります。このようにして、ポジティブサポートを継続することで、「彼らしく生きる将来像」を描き、それが表現されるように参加者たちも気持ちを向けられるようになります。もちろん、その人の置かれる現実は常に変化していくます。現実が変化するということは、その人も、その周りの人も、人間関係も、変化するという意味です。それらの変化をも踏まえつつ将来を考えていくことに、ポジティブサポートのセッションの継続の意味と必要性があると思います。

ティーブサポートのセッションの参加者は、ジュン君が新しいチャレンジを持ち望んでいるように感じ（註）、御両親はキャンプ参加をジュン君に提案しました。そして、ジュン君はその提案を聞いて喜び、実現したのです。

アメリカのキャンプに参加するにあたって、ジュン君についての必要書類などに関しては、中学部の担任の先生にも協力していただいたそうです。そのキャンプに受け入れてもらうのに必要だった書類の記述内容は、ジュン君はどんな人なのか、特徴的なことやジュン君のコミュニケーションのとり方についてでした。

ジュン君の特徴的な部分

コミュニケーションのとり方

この夏、ジュン君は家族から離れてアメリカで二週間、キャンプ生活を体験しました。このところ、ポジ

ジュン君は年齢のわりには小柄で笑顔のさわやかな、人に好感をもたれる素敵な中学三年生です。幼稚期にア

ジュン君の夏休み

メリカで生活していたからか、英語の音や文字の形に興味を示し、映画、音楽、絵本なども英語のものを好みます。人と関わり、やり取りすることが好きです。相手を真似ることで表現力を掴んできたようです。複数の単語を使って気持ちを表現するわけではありませんが、身体の動き・行動や表情で表現力豊かにその時その時の気持ちを相手に伝えようとします。まわりをよく見てその場に応じて行動に移すこともでき、協調性が高いとも言えるでしょう。

お父さんは、「人は自分を大切にしてくれる」と思い、人を信頼しきつていると言います。最近のジュン君は、人間関係の中でも人を選別する力があります。それは、私はすごい生命力だと思います。最初から守る態勢でいるのではなく、まず人に関心を向けることの大切だと考えるからです。お母さんがアメリカのキャンプでジュン君のコミュニケーションについて聞かれた時、ジュン君にしつかり説明し、ジュン君が見通しを持

てれば相手に対しても信頼感を持つだろう。そして、感覚的に多用な手段で説明してほしいとおっしゃったそうです。絵を用いるなり身体的な動きなどで伝えれば、ジュン君が理解すると思いますと伝えたところ、キャンプのスタッフは安心したそうです。

選択肢を見つけ、選び実現するということ

自分の可能性にチャレンジする機会があまりにも限られていて、自分の次に進むべきステップや目指す方向性を見出せない。そればかりか、模索するチャンスさえ与えられないもんもんとした感覚をジュン君は表現していましたように見えていました。その頃に、ジュン君にも自分を試す機会がある開けた世界へ、と御両親が積極的に考えアメリカでのジュン君のキャンプ参加を実現させたのです。このように将来の方向性を考えて行くことを支えるのがポジティブサポートのセッションのもつ大きな役割です。

ジュン君が家族から離れて二週間生活するということについて、御両親とジュン君はしつかりお話をしたそうです。ジュン君がそのキャンプの参加の提案を喜び、実現を最後には自己決定をしたように見えたキャンプ。しかし、自分の可能性にチャレンジすることは、冒険です。その冒険は、新しい人間関係の中で新しい環境に一人で飛び込むということです。いつものように必ず守ってくれる家族と一緒にいるからこそ、ジュン君には冒険です。そして、これから突き進み生きていく上でその冒険をばねにできると周りの人たちが信じられるほど、ジュン君はたくましくなっていたのです。御両親は、その冒険の意味と親の思いをお話したそうです。

「疲れたら無理しなくてもいい。でも、決めたからにはやれるだけやりなさい」。そして、ジュン君は御両親とアメリカへ出発しました。成田でも飛行機の中でもジュン君は、わくわくした様子だったそうです。

後から御両親から聞いた話ですが、ジュン君がキャン

プに参加することを知った人たちの多くは、日本に帰ってきてジュン君が学校に行かなくなるのではないかと思つていたようです。それを聞いて御両親は、「確かにあり得ることだと思った。そして、一歩新しく何かに挑戦することは、同時にリスクもあるもの」。そのリスクは、例えば、ジュン君が寂しすぎて耐えられないこととか、体を壊してしまうこととか、ジュン君が劣等感だけを味わつて帰つてくることとか、御両親はいろいろな可能性を考えただと思います。私はその上の決断だったのだと思います。それはやはりジュン君がチャレンジすることの意味、それで得られる多くの内面の力を強く信じられたからこそその決断ではなかつたかと思います。

個別のプログラム

ジュン君が参加するキャンプに着いた時の第一印象は、皆さんのがゆるやかで、とつても伸びやかに過ごしている感じだつたそうです。

ジュン君の御両親も一週間ジュン君を他に送り出すことは初めての経験です。ジュン君のご両親はスタッフにキャンプのプログラムを見せてほしいとリクエストしました。その時、見せてもらつたプログラムにはジュン君の名前が書いてありました。つまり、ジュン君を見据えた一週間の曜日別プログラムが用意されていたそうです。だからこそ、ジュン君の特徴的な部分を明記する書類が必要だったのでしょう。そして、それがジュン君にあるということは、参加者全員の「個別」プログラムがあるということを意味するのでしょう。そこで、御両親は「個別」とか、「個性」というものが本当に大切にされているなど実感しました。そして、安心してジュン君を託しキャンプを去つたそうです。

日本の養護学校でも「個別指導」という教育方針を掲げています。しかし、その個別指導という言葉の定義が曖昧ではないか、さらに言えば、間違った言葉の選び方ではないかと思うことがあります。個別指導をするには、その生徒個人を認めることから始まらなければなりません。一般評価基準のようなもので彼らを計り、そこから年齢的に平均的な能力をその個人の目標にすることは、個別指導と言えるのでしょうか。つまり、能力を狭くとらえ、できること・できないことで判断し、苦手なこと、できないことを取り上げ補充・強化することを目指し一人一人の目標をたてるから個別指導というのでしょうか。私は、個別指導という意味を、個人をしつかり見据えて、その人が必要とするなどを考えることから出発するものだと考えます。

キャンプを終えて帰つてくるとき

期待以上にジュン君は静かな満足をキャンプで体験しました。御両親が迎えに行つた時いい顔を見るジュン君を見て、楽しかったんだな、困つたこともなく、よかつたんだなと思ったと言います。「不安だったかもしれないけれど、ラッキーなことに不満はなく過ご

せたんだなと感じました。お友だちもでき、キャンプを去るときには握手を交わしたり、抱き合つたり写真を撮つたり、スタッフの方々にもまた来年おいでね！と抱擁され、お見送りされた」とおっしゃっていました。

アメリカを去る時になつて、飛行機が離陸の準備に入つた頃、隣に座つていた御両親が気づくとジュン君の

顔には大粒の涙。彼は感極まるかのようになふれ出る大粒の涙を手で静かにふいていたそうです。それは、どんな気持ちだったのでしょうか。もちろんシンプルな感覚ではないと思います。彼は自分で決定したことと実際にやり遂げました。不安であつたかもしれないけれど、新しい人間関係に支えられたことでしょう。そして、嬉しかつた。感動的な体験だったのでしょう。自分にチャレンジして、やり遂げることができた。そんなにも濃い、彼にとつて意味深い体験をさせてもらった場所を去るのが名残惜しかつたのでしょうか。

その飛行機が成田に着いた時にもひつそりとした涙を

ジュン君は浮かべていたそうです。それは、どんな気持ちだったのでしょうか。終わつたんだなという気持ちと、帰つてきてジュン君が去る前と同じ「現実」が待つていると実感したかもしれません。

今のジュン君

ジュン君は、一段大きくなつて帰つてきたようです。なんだか背も大きくなつたのでは？と思つほどです。今ジュン君を見ていると彼の穏やかな自信と、安心感が感じられます。自分が決断したことをやり遂げ、手 겁えとしてその生活が期待以上だつたことや人間関係も楽しかつたことの表れではないかと感じられます。自分の決断が冒険だったとしても自分をより信じられる素晴らしい体験をしてきたのだと思い、応援者としては嬉しい気持ちで一杯になります。

お父さんは、この体験を通して「こういう場所がある」ということを知つたことがジュン君にとって一番大

きなことだったのではないとおっしゃっていました。

確かに、おおらかに自分を受け止めてくれて、生活は楽しいものなんだ！ と当たり前に過ごせる場があるということを知り、彼の人生観は変わったかもしれません。

そして、そのような所で過ごすことができるという選択肢の存在に安心感を覚えたのかも知れません。

より多い選択肢の必要性

御両親は、キャンプをインターネットで調べたとき、多種多様なキャンプが多数検索できて驚き、どれを選択するか迷つたと言つていました。いわゆる重度の身体的な障碍のある人も参加できるキャンプもあり、歴史も古いところが多いことにも驚いたと言つていました。ジュン君が参加することにしたキャンプは、二十五年の歴史があり、毎年参加者の数とボランティアの数が同じ位になるほど、世界各国から集まるそうです。

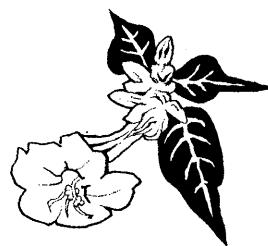
ジュン君の御両親は、本当に日本もまだまだアメリカ

から多くのことを学べるなどつくづく思つたとおっしゃっていました。「アメリカには、生きていくための楽しみなどを提供する場がある」と実際に行つて感じたようです。私もより豊かな選択肢が存在すると思います。このような選択肢の存在を知ると知らないのとでは大きく違います。ジュン君の場合はそこに参加できる恵まれた環境にいたことも事実です。

私はジュン君のように現在行き詰まり、開けた世界を体験したい人は日本にもたくさんいると思います。そして、ポジティブサポートを通してその現実を考えていくと、やはりあまりにも選択肢が無いようを感じてしまうことが少なくありません。しかし、それよりも問題になるのは、きっと選択肢が存在していてもそのことを丁寧に考えられないことなのかもしれません。

合わせるのではなく、創る将来像

私がポジティブサポートに魅了された最大の理由は、



人の持つ可能性に基づいて将来のヴィジョンを創造していく

く作業であることです。可能

性に基づいて創造していく作業には、現実を受け止め、柔軟に・発展的に考えることが

同時に必要となります。ポジ

ティブサポートは、現在のその人、そしてその周りの状況・環境をとらえ、その現実から出発します。その現実から出発するということは、その人や環境をまず肯定的にとらえるということです。それが現実を認めるということであり、その現実に潜み今まで気づかなかつた可能

性や、新たに展開していくことのできる可能性に気づくことへ繋がっていきます。そして、その人にとってより望ましい環境や将来を考えていく力を促す原動力となります。

誰もが自分らしく希望をもつて生きていきたいと思っています。すると私は信じています。自分の力を試してみたい感覚や自分の世界を切り開きたい感覚は、誰もが共感できる感覚でしょう。そのような時、「何を求め、どうしたらしいのか」を考え模索するでしょう。そして、納得し

*

て自分らしく生きるということを改めて考えるでしょう。でも、それは、一人で考へるには難しく感じてしまうことがあります。

ポジティブサポートのセッションには協力的な人たちが参加します。ジュン君が現実に行き詰まりを感じているとしたら、どのような状況に行き詰まりを感じているのか、ジュン君はどんな夢や希望を持っているのか、どんなことをチャレンジしてみたいのかをポジティブサポートのセッションで参加者全員が丁寧に考えてきました。

そして、ジュン君と共にその現実を踏まえ将来を考えていきます。つまり、ポジティブサポートは、既に存在する違う可能性に気づかせてくれる場とも言えます。協力的な人達が集まり、ジュン君のこと、そして、彼の将来を真剣に考へる場ができると現実が発展的に動いていく。そして、将来を発展的に考へ創っていく作業を共に

くり返し行つていくことは、希望と可能性に気づかせてくれる。そうして、希望と可能性を信じ近い将来を描いていくことは、今を受け止め生きる意味を見出せると私は思います。これらは、自分らしく生きたいすべての人にとって大事な発見、希望、勇気に繋がると思います。

現実は変わるものであり、可能性に富んでいるということをポジティブサポートは実感させてくれます。だからこそ、私は誰もに共通する大事なものをポジティブサポートは大事にしていると思うのです。

(ポジティブサポート研究室主宰)

註 「現在からの一步・夢への一步」第一〇二巻十一月号十八
ページ参照